

# 2016 / 2017 平成28年度



パラリンピック終了後の報告会で、合わせて6個のメダルを浅見審査委員長の首にかけた。「チャレンジは目標がある限り続く。東京2020パラリンピックではさらに上を目指してほしい」と激励を受けた

## チャレンジ助成10年目。 歴代のOBチャレンジャーが、 リオで咲かせた大きな花。

スポーツチャレンジ助成10年目。その成果の一端が、リオオリンピック・パラリンピックの両大会で花を咲かせた。

オリンピックに出場したのは、カヌースラロームの羽根田卓也選手と、女子7人制ラグビーの山口真理恵選手。また男子7人制ラグビーの審判として大槻卓氏が、奨学生のサヤラット・ボンナリー氏はラオス男子柔道のコーチに選出された。一方パラリンピックには田中康大選手(水泳)、山本篤選手、多川知希選手、副島正純選手、佐藤圭太選手、芦田創選手、鈴木徹選手、辻沙絵選手(以上陸上)の8選手が出場した。

大会直前に開かれた壮行会で、「個人の100mはまだ力不足。でもリレーはメダルを獲りに行く。YMFSファミリーの4人でバトンをつないでメダルを持ち帰れば、これ以上の恩返しはないから」と話したのは芦田選手。その言葉どおり銅メダルを獲得し、山本選手が走幅跳で獲得した銀メダル、辻選手が400mで獲得した銅メダルと合わせ、帰国後の報告会で浅見俊雄審査委員長の首に合計6個のメダルをかけた。

オリンピックでは、女子7人制ラグビーで10位になったサクラセブンスの山口選手が3トライをあげる活躍を見せ、レフリーの大槻氏は合計11試合を担当した。カヌースラローム競技でアジア初の銅メダルを獲得した羽根田選手は、その偉業によってメディアの注目を集め、「オリンピックでメダルを獲る」「カヌースラロームという競技をたくさんの人に知ってもらおう」という目標をともに成し遂げた。

帰国後の報告会では、祝福の言葉とともに「チャレンジは目標がある限り続くもの。東京2020パラリンピックではさらに上を目指してほしい」と浅見審査委員長から激励を受け、オリンピック・パラリンピックに出場／参加した12名全員に審査委員長奨励賞が贈られた。

アメリカ大統領選挙でドナルド・トランプ氏が当選。第45代アメリカ大統領に就任した。リオオリンピックではカヌースラロームの羽根田卓也選手が銅メダルを獲得。またパラリンピックでは陸上男子4×100mで体験チャレンジャーの4選手が銅メダルを、山本篤選手が走幅跳で銀メダルを、辻沙絵選手が陸上女子400mで銅メダルを獲得した。

### スポーツチャレンジ助成事業

2020東京オリンピック・パラリンピックという新たな目標ができたことで、チャレンジャーが大幅に若返った。採択された体験チャレンジャー(NEXT含む)のうち、競技者の平均年齢は18.4歳。一方、研究チャレンジャーも20代の3名を含む平均32.3歳という若さだった。夏にはリオオリンピック・パラリンピックが開催され、OBを含む合計12名のチャレンジャーが活躍した。



#### ■平成28年度(第10期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	34件	12件	1,175万1,027円
研究助成	56件	15件	1,292万6,500円
NEXT	6件	4件	199万8,500円
奨学生	10件	2件	480万円(1年分)
計	106件	33件	3,147万6,027円

### スポーツ振興支援事業

#### ■ジュニアヨットスクール葉山

夏休みに開かれた「国際交流日本ジュニアヨットクラブ競技会」[全国中学校ヨット選手権大会][東日本OP級セーリング選手権]に加え、海外で行われた国際大会「レーザー4.7級世界選手権」「レーザーU-21世界選手権」に多数のスクール生が出場した。全国中学選手権では、須永笑顔選手(中2)が女子優勝を果たした。

#### ■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

全国36クラブから128隻・162名の選手が参加した。最優秀選手に贈られる荒田忠典メモリアルカップは、レーザー4.7級で優勝した桐井航汰選手が獲得した。

#### ■スポーツ教材の提供

862件の申請の中から146団体の提供先を決定。申請比率の高かったラグビーセットについては、提供先を60団体から75団体に拡大した。ワールドカップでのラグビー日本代表の活躍によって、取り組んでみたいと考える指導者や子どもたちが増加したものと考えられる。

#### ■全国児童 水辺の風景画コンテスト

初めて1万点を超え、過去最高の10,321作品が全国から寄せられた。またコンテストの趣旨への理解・賛同がさらに進み、新たに独立行政法人国立青少年教育振興機構の後援に加え、俳優であり画家でもある国広富之氏が審査員に加わった。「外に出て感動を味わうこと、その感動を自分の手で表現していくという経験。この二つのことの大切さを審査会の中でずっと感じていた」と国広氏。

### スポーツ文化・啓発事業

#### ■第9回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞



[功労賞] 今村 大成 氏  
日本若手卓球選手の武者修行を支え続ける「デュッセルドルフの父」



[奨励賞] 野口 智博 氏  
障害者スポーツ全体の課題に先鞭をつけた挑戦者～トップ選手の指導からパラアスリート強化の現場へ～

#### ■調査研究

テーマ毎に分けた2つのプロジェクトを推進した。障害者スポーツ・プロジェクトでは、藤田紀昭氏をリーダーに「障害者スポーツを取り巻く社会課題研究」を継承し、新たに「社会的認知度とメディア報道の関連性」等に取り組んだ。またトップスポーツ・プロジェクトでは、岡本純也氏をリーダーに「トップスポーツによる地域スポーツ環境への貢献」をテーマとして、「トップスポーツ関係者や試合観戦者調査」等に取り組んだ。両プロジェクトの活動成果は年度末に報告書にまとめて刊行した。